

善惡兩頭浮世奇看 全

^ 13
3134
6止



門 へ 13
3134
巻 6

善惡道中紀第六編

善惡兩頭浮世奇者

頂恩堂 跋

昭和九年九月十二日 購求



善惡兩頭浮世奇者序

茶筒机へ兩頭の獸あり命々鳥を雙首は

禽形を叔教兩頭は蛇を怪め宋玉並頭の蓮

を賦は康叔の二徳の未王濬が三莖は瓜瓞て

是台凶奴示はの天機あり蓋人の心も善惡

邪正の事爰譬言ぐ一身ありて兩頭なるがごとし

善進のんとしてんがら惡を走れぬも



善道

善ぜんとて我われ任たづるる中ちゆうにはたた故こ小せう前ぜんよよ小せう善ぜん
我われをも心こころをも後あとには大だい悪あくをは侵おままとと人ひと情じやうは
常つねにはりとれれをは西さい施しのは宿しゆく仗じやうのは下げ官くわん街がいのは物ぶつの
西さい頭とうをは視し多た髻げのは涎だん流りゆう不ふ知ち始し白はく皇かうのは後ご妃ひ頭とう
双ふた枕まくらのは影かげ法ぽう師しをは窺のぞくは店たんでん配はいはは趙ちゆう高かうととまま心こころに
飛とんと謀ぼう叛はんをは萌もええ結むす成なりがは銀ぎん世せ界かいのは居ゐるは居ゐるは
一いつつのは衣い小せう雙ふた首くびはは中ちゆう睦ぼく————繁はん氏しのは二に婦ふは

相あひ合あ膳ぜんのは外がい面めん姉あね婿むこのはかかよよめめ宮みや本ほん荒あ
本ほんのは武ぶ術じゆつのは両りやう刀とうのは英えい名めいをはととむむ心こころには親おや分ぶんの
食い客きやくのは二に本ほん半はんのは脚あしをは番ばん符ふ捧た持もち扱あのは
何なに某ごと關かん白はくのは雙ふた重じゆうのは臚い行ぎやうじじとと聞きけけとと
二ふた枚まいのは舌したのは戲げ作さく者しやのは癖くせめめととよよめめ放はな免めんのは
懸かぬぬをは敷敷くく然しかるるかか此この善ぜん惡あく道だう中ちゆうには著しやく家か
一い筆ひつ菴あん主しゆ人にん二につつのは體たい行ぎやうとと中ちゆう黃わう泉せんのは後ごへ

行脚せしむる殘編を次のに絶つる仍る書房
 頃恩堂のほろぐ予其末巻を綴るゆゑ
 彼一筆翁の画工著述の両顔みく辞断遁
 さぬ流時方子好まざるに雙車同くかたし
 画のまゝ文み劣る拙繪もあれを奇変怪異
 むらゝる八百屋の店あゝ一寸の所用の足人
 たり夫れを見まぐ僕あんなに人並み嘘の法け

此の文方み至るるに壹文はも肉體は染
 屋哉看的うゝ視かゝる是もさつおと絹
 具世物ともさあしぬ

昔嘉永二己酉年九月上旬方癡飯倉
 神明の土産小彌南く破風箱の形み逐目
 一晝夜小稿紙見ん

樂亭西馬題



善惡道中記全迷所一覽等四編造
一筆菴溪齋先生著述

同五編

善惡色欲二道話

同六編

善惡兩頭浮世奇看

同七編

善惡擯猛途意

右之卷樂亭主人編次引續出板仕ゆる
所來以高覧者希す

夫人間の善惡ハ唯心の定めよるを護るあれは都て日用の
雜事ハハふ及び一日の投觀々々も其見よりの聞りは
道をとり透れば悪となり是は能くして道を守らば皆善
を勸るの一助と成ぬを登へハ戯場の狂言も敵役謀叛人
さあぐの奸計暴悪を働くとも終に善人の爲不亡び矢ぬ
又色欲ふふける男女ハ一旦の誤りよりそれ、憂難難有る
ハ其身の罷ふて已くか求むる所を何れも何事若きりけり
あふ思案の外といふ心より引出さるて諸人ハ害はる



かよくさる人
のあまの
あひま

生か
流
の早
か
五代
白
か
け
ら

い
ま
ま

あ
ま
ま

あ
ま
ま

あ
ま
ま



あ
ま
ま

あ
ま
ま

あ
ま
ま

あ
ま
ま

あ
ま
ま

あ
ま
ま

あ
ま
ま

あ
ま
ま

悪人との異あり故未あつり先兆をくみて又安堵に至る
 こころは善悪邪正を種とて喜怒哀樂をむねとあり
 くる夏枕も身をざれば銘々誠ともあるべし

樵里の街のいりての諸人心を蕩一絶し天界も飛も
 宜あり孫養ふ養つる老人さへ朝夕不足のあきりの
 此廓のみつりて心の若中を樂しむありとれど是を
 善悪の道理をりて悟る時ハ樵女藝者いふ不及を
 めのく高金少て抱られし身あれば夫程の善悪界の

勤めせ給ふるは能客を養應よく客は樵の
 おのく其業を励む怠るざるなり是は續ひて茶座
 舟宿やうそ若しものに至る迄其業小苦しむあらん
 未社がほとめ酒小二日酔の苦しむより我家らくは
 一盃飲ころそ縁の樂しむあるべければも業とありて
 無理ある酒の吞給むも夜もいとむべし其申す
 己の業を捨て世世界の戯を盡すのどく教はら
 何事ぞ廓中数千人のうち居候はる我をこのり

天理ふけ外へ皆その業を勤むる也と悟るといふ
巻中の画のごとく

九生あるの一日たりとも其業の怠りたるを
天の道不順とて一蚊一蠅とり物の心を結ぶ
蚤蚊の人を刺し猫の鼠をとり人の人を嘯鷄の時
をうむ鳥の東雲を告る皆夫々の業なるを
世界への不合持といえる積あつた朝文人の大切
を為さず一火のえあり是又一時もあつて叶ふ

この思ひきりの世火のこゝろ小身上を以て一命をおと
けりかぞへぐさされども人の家百年も二百年も焼る
夏あられが諸職人本行其外の後世難義なるべし
水も供をめて田畑家を損する所は又旱損の場
十分の徳を得ん然れども合持の所も常も忘るべし
各自の由断なく善事小せむべし

四奈河原の具世物さそりく善悪なりまづ猿狂
言ハ善怒哀樂の順礼場同者の彼女々小泪を拭かせ曲馬の



「かみさん
おるのやんすッ
あの子」

骸
ら
の
骨
く
ん
物

おのひ
やんす

暑骨

骸
の
骨
く
ん
物

「あつこ
おんす」

あか
か
の
骨

あ
の
骨
く
ん
物

あ
の
骨
く
ん
物

あ
の
骨
く
ん
物

あ
の
骨
く
ん
物

あ
の
骨
く
ん
物

あ
の
骨
く
ん
物



「おのひ
やんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

「あつこ
おんす」

轉業意馬心猿の手綱をゆるめば大と猿の南カよく
 人のかへを利して見物をとる居合後の鋭ぎの刃轉
 業の一奉細皆浮世のそのもあまを慧をあるべし
 づるの中あも寝生の小娘坐願の相撲天の岩戸のお戸扉
 あどへ善悪あもたえかしくみ其目の業ありとも
 余りともあれた心得あり川小流り死骸そく女の後卧
 て全身をたふらるる廿四孔の辻君と聞をはどりけり
 へ不見せび嗚呼禽獸も心はれべ人間小迫し神のままへ

の一身我我く人道捨るはいふぞや
 其見せりのふよりてひとつの善悪をあり有るなり
 丹波國より生捕せれば是箱根うらま川らある
 山東の丹子より産出する善悪邪正むくく
 何つとこの國猿蟹郡花咲町といえる野ふ山川を
 桃右衛門と唱ぶ高人あり年四十をまゝれども一子もた
 を憂ひて家小年古く持傳えし西王母の一軸けり
 とき小一心をうけ日毎朝夕祈りし小松右衛門の妻ある



山
松を
あつらへる

山
松を
あつらへる

山
松を
あつらへる

山
松を
あつらへる



山
松を
あつらへる

山
松を
あつらへる

山
松を
あつらへる

山
松を
あつらへる

日せんく川の峯を道りしふ川より柳の流きある
奴見つけ拾ひとりて見るに二ツの莖小柳の葉の二ツ
生るるもぞありし全例の波ありあふ言一ツありや
つらむれを脱ふ二ツ生るる夫もつらび内へりち帰る
て何まり目面しき柳かれ夫も見せこれと二人
して喰ひけるふあひあ一だ二ツの葉へ味ひ甘く風
味よく又一ツの方の若くあぶ一同一莖小生るる
形味ひの異なる不思議の夏と思ひたり

柳柳太衛門が妻かかの柳を喰てよりたぐあぬ身とな
まれば夫も大き不悦びとまふしく西玉母のさつけ
あくるあふんと月のころるを待程ふを月以り
安産一玉の如き男子をぞ産むと一なる怪し以
うあけ子の顔二ツありてと二女あめ柳の如くあそ
ありたる柳太衛門夫婦の両顔の男子をのうけてまきふ
うれひなるが不豆ある子の不便といえるごとく又お玉母
の授けあくる子あれば柳もいとふ及び産後生長し

つと渡世を嫌ふあつた出家とあり一夫婦を悪を滅せし
しと生ひお其心めて幼り育ける

あつたふけ子生きたに志さう右の頭へ色白く鼻筋通
て眉目形羨やくく朱和すて女習はり又左のかうら

色悪く鼻ひらたく眼つらうて甚だの悪相あり
是先年拾ひたる桃の実一つの中へあやうく一つは苦く有る

がかるる異形の子成産べき知れぬまよぞなりたる
ね両頭の汗生くお志さうして悪相の首へ酒を好む

すの善相のくびの餅をこのむ是酒へ食物の中より
悪するものあり餅へ食物のうち善あり其故へ先

古人も酒を狂業といひ又憂情ありとも俗小氣遠水
としひて人の心を乱し氣の小さぬのものこれ飲ぶ者

太臆とあり金銭を多し病ひをまし笑ひせし
て終ふ其身を換ひ家を破る時これ酒のせい悪なる

故也少く呑とも多しまどはるるは又餅を喰ひて
身を亡し家残しするもの世を聞かぬを六條の善

あるものあるべし 考花で箱あるを喰ひ身を破るなり
あるべし 光陰早くしては伴役多く先報させらるるが
またく悪相善相めざらんとんたりの頭六戯場の敵
彼の如く右の首へ寶車師のごとく也こらあまらふし
ごらあまらふは伴悪念起る時善の頭志をり小居松
ふり心小善念起るとたの悪のくびまらたはひる松
きり人の心の善悪日ぐ小務りきりなり皆如新
あるがごとく

悪の首へ甚だ悪氣積りて家内のははら多と邪見小好ひ
つづくの徳ありて由打撃さ大聲よけて月小悪念跡
増けり善の首へ常小悪根をとり毎朝修行者
或へ乞食非人小子の肉を出し又小負ひのめを憐れ折れ
く破るるるるかく善の頭六徳をまら傍りく悪の首
が罪を犯す人の心もまら形もごとく
ある日思業橋を通りける小善の首へ寺ありおれ人
思ひ又悪のくび小船で走らせんとおれ心の二ツ身へ一ツ

行川^{ゆき}渡る^りの心^{こころ}まよひて^また^たらん^んふ^ふれ^れる^るる^る善^{ぜん}の首^{くび}今^{いま}
 日^ひ小^こ叶^かの故^{ゆゑ}右^{みぎ}の足^{あし}踏^ふむ^むる^る強^{つよ}く^くと^とう^うく^く寺^{てら}多^たり^りふ^ふ
 行^ゆく^くる^るる^るる^るる^る草^{くさ}卧^ふて^て名^な善^{ぜん}の^くび^ひう^うつ^つら^らと^と
 して^あ歩^あゆ^ゆる^るふ^ふ悪^{あく}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り
 小^こ道^{みち}ふ^ふて^て悪^{あく}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り
 十^{じゅう}分^{ぶん}小^こ酒^{さけ}飲^のむ^むる^るる^るる^るる^る酒^{さけ}狂^{くる}の^うへ^へ友^{とも}と^と喧^{けん}嘩^か成^な
 仕^し出^だす^す一^{ひと}歩^あり^りふ^ふ打^{うち}つ^つる^るる^るふ^ふつ^つる^る善^{ぜん}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り
 下^か戸^こあ^ある^るふ^ふね^ねむ^むけ^けさ^さう^うた^たる^るお^おも^もろ^ろく^く悪^{あく}身^み酒^{さけ}氣^きふ^ふ後^あね^ねら^らし^し
 寝^ねて^てふ^ふひ^ひ多^たく^く寝^ねて^て一^{ひと}歩^あり^り目^めを^を覚^さめ^め後^あ悔^くみ^みを^をし^し
 人の^{ひと}家^いの^あ惣^{そう}易^いと^と表^ひえ^える^る朝^あの^あ早^{はや}と^と遅^おそ^そと^とふ^ふら^らし^し
 貞^ま原^{はら}先^ま生^{はら}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り善^{ぜん}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り
 て^{その}其^{その}日^ひの^あ家^い業^{ぎやう}ふ^ふ取^とり^りか^かる^るふ^ふ悪^{あく}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り
 好^{この}む^む善^{ぜん}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り夢^{ゆめ}見^みる^るる^るる^る
 る^{その}悪^{あく}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り間^まを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り
 家^け業^{ぎやう}ふ^ふ急^いぐ^ぐて^て金^{かね}を^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り毎^{まい}日^{にち}善^{ぜん}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り
 その^{その}悪^{あく}を^をぬ^ぬぐ^ぐひ^ひる^る

寝^ねて^てふ^ふひ^ひ多^たく^く寝^ねて^て一^{ひと}歩^あり^り目^めを^を覚^さめ^め後^あ悔^くみ^みを^をし^し
 人の^{ひと}家^いの^あ惣^{そう}易^いと^と表^ひえ^える^る朝^あの^あ早^{はや}と^と遅^おそ^そと^とふ^ふら^らし^し
 貞^ま原^{はら}先^ま生^{はら}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り善^{ぜん}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り
 て^{その}其^{その}日^ひの^あ家^い業^{ぎやう}ふ^ふ取^とり^りか^かる^るふ^ふ悪^{あく}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り
 好^{この}む^む善^{ぜん}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り夢^{ゆめ}見^みる^るる^るる^る
 る^{その}悪^{あく}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り間^まを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り
 家^け業^{ぎやう}ふ^ふ急^いぐ^ぐて^て金^{かね}を^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り毎^{まい}日^{にち}善^{ぜん}の^くび^ひを^を出^だす^すふ^ふる^る一^{ひと}歩^あり^り
 その^{その}悪^{あく}を^をぬ^ぬぐ^ぐひ^ひる^る

神仏を祈願ふの心を清くして他念なく一向一心に
 行ふれば得るもの良驗もある事あり己が徳を
 事をついて無理を頼みけし神仏を悪徳人の方人
 小せんと頼むの事あるは行心よふ糸傍の英に如女
 成見て心をうつし邪念を獲たておひあはる徳を
 する心よふといふとあはるよりの神仏もて由利益あ
 るをいふはこれありてあり
 ある教善の類つてまて能入するがうといひ

悪の首へ土着へ思ひいり金子を棄ててをせしむる
 善の首へは物おとふ驚き目を覺しそられは善人と
 二つのくびをてひとの形骸をけりてひとの悪は首へ
 金を盗み出して心よくせんと思ひし善のくびみ
 見付らまは上へおれりふまて善の類のたづねを極
 んで打擲するつゝの類小底を付し是別人の心の持
 ちて我の心より身をせむるの道理あり
 寐て吐つてをきり我身小なる徳への如く悪のくびも

善の首を打擲して同じ我體を痛め難淺しなるが
 ちさきより二の首大きき不和らあり善の首の飯
 を喰ふと思へば悪のくびへ髪を結んといひ善の首
 が寒いとて重衣を着て暑ありといへば悪のくびは汗
 を流す程で扇をつらふ善の首が寺に入りふゆるふと
 思へば悪の首は釣ふ釣んといひ悪の首が物うつを
 でのこくけきく善のくびへ干物で茶づけを喰ひ
 何事もてんぐむきくく我身が口舌心の修ふ

あつた大きき不自由のからいといふありあなる
 善悪二つの顔くびひふいどを合てくくじなるがたる
 夜心のつらより二人おの夢成具するなる不地蔵
 がさる忽然と現るさるひ善の首をいさるひとや
 くて極樂浄土へいさる志めんとさるひふ所へ赤鬼お
 られて悪のくびを地獄ごうへ引よせ給んといさるふ
 顔へさるの體へひとあれはともさるふもかたづけが
 たく双方異ひあうとさるるが後小地獄極樂

の境まで来りおぞろ菩薩を金箔を取出し
手早く善の首の右の腕をくをおしあふ悪を
又大ききやりある釘抜とり出して悪のくびの舌を
ぬんとするかく双方より何れそひけきども何れ
骸骨一ひあれを詮方なく焔魔王地藏菩薩水
さぬぐ相續のうへま所けきびの救してあやむ
かえさんぶのあり悪の首のよく罪はけく
ふおめて半身のとの目急ふ毎地善はくびを

地をくへおとほるるこれども善の頭をまき善
行を積ふおいて悪の首をきりあけ救して
優ふ極楽へおびくべくと焔魔王より急度
いひつけぬくあやむを帰しあふと思へば夢の覚るる
夫より悪の首の首のつげのおそろしきふ初て我
おこあひのつとまの事と悟り先兆を悔み頭を
なきみくつけくぐ愛ふ鎮鬼道人とひえ有徳の
人なりは聖のおしえをうけんと世人毎日つとひる

よしを聞て彼善悪の首も道人は許へし
其教へを受てりけり

其時鎮鬼老人二ツの頭ふおして曰

義楚六帖二十四ふいづく一匹の犬井の中を覗き

我影の氷ふ写るを見て怒りこれ杖命んて終ふ井

ふ落て死是我ありと思ふが故ありと云

皆人我なりと思ふが由急ふその心我身を責めて

一生紙苦しむ彼大なる写る我うげを見ていの

了身をうしり入事これ一身おして二心あるがゆ

汝が二ツの頭ふひふ争ふも入と云不同ト今より

後悪を切て善ふのたまむるしとて打出の小槌

りて悪の頭を打ちきつたちまら其あふと云ある

痛と我ありあけり

鎮鬼道人のかげふて悪の首もあび落て今も

まよふとふ無底の着りのところあり善のくびちまふ

ほびはるく五常の道を守り二親不孝を

人間生 筆算主人作 善惡道中記 全一冊
人間一生のむねと道中記のむねをくわしく述べた

善惡道中記 第一編 同作 同画 同 迷所圖會 全一冊
善惡道中記第一編の同作同画

同 第三編 同作 國芳画 同 迷所一覽 全一冊
第三編の同作 國芳画

同 第四編 同作 貞秀画 貧福悟道捷徑 全一冊
第四編の同作 貞秀画

同 第五編 西馬作 國輝画 善惡色欲二道 全一冊
第五編 西馬作 國輝画

同 第六編 七編 全一冊
第六編 七編

相撲 改正金剛傳 全一冊
立川馬馬作 全一冊

力競 相撲取組圖會 全一冊
力競 相撲取組圖會 全一冊

實語教童子教餘師 全一冊
實語教童子教餘師 全一冊

增補 繪本實語教童子教餘師 全一冊
繪本實語教童子教餘師 全一冊

畧 淨瑠璃圖會 全一冊
畧 淨瑠璃圖會 全一冊

嘉永 正月再刻 東都書肆 頂恩堂 本屋又助梓
嘉永 正月再刻 東都書肆 頂恩堂 本屋又助梓

